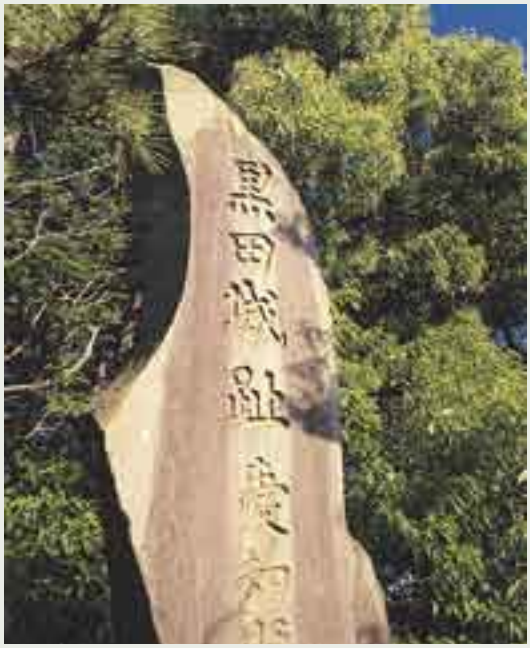
木曽川文庫

KISSO

Vol.15
1996 SUMMER

木曽川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思います。
今回は木曽川の名を冠した木曽川町を特集し、
川の変遷や治水事業などを追跡。
明治改修第四篇では分流後の成果などをご紹介します。



INDEX

ふるさとの街・探訪記《木曽川町》
◆清流が育てた町・木曽川町
AREA REPORT
◆川と人とのよりよい関係を目指して
気ままにJOURNEY
◆木曽川に浮かんでは消える歴史のドラマ
歴史ドキュメント
◆現在の木曽三川下流域の礎を形成した分流工事
TALK&TALK
◆明治改修の成果と影響／丸山幸太郎氏
民話の小箱
◆明神のおいかり

建設省中部地方建設局
木曽川下流工事事務所

清流が育てた町・木曽川町

木曽川町は、木曽川流域の市町村の中でもただひとつ、名だたる大河の名を独占する町です。その名の示すごとくこの町の歴史は、木曽川との共存、そして水との闘い…。自然堤防洲や砂礫大地という土壌を利用して、絹や綿織物を中心に発展を遂げました。交通アクセスが充実した今日、都市化現象も進行し、「緑と光りと安らぎ」の町づくりを目指して、多彩な事業が展開されています。

木曽川町空撮

玉ノ井絵図解読図

木曽川町のあらまし

愛知県の西北端、木曽川が大きく西から南西へ流れを変えるところ、東・南・北の三方を一宮市、北西は木曽川をはさんで岐阜県に接するところに、木曽川町はあります。この地域は犬山扇状地の先端部にあたり、海抜は八m前後。東西四・二km、南北二・二kmの町域は、北部から南部にかけてゆるやかな傾斜をなしています。

そもそも木曽川の名を冠している市町村はこの町のみ。名だたる大河にも固有名詞をもたない時代がありました。その本流は広野川、鵜沼川と呼ばれ、山を駆け下る度、地域を越える度その名を変える…。「昨日目の前にあった川が洪水の一夜が明けるとどこかに消えていた」といった現象もしばしばで、「暴れ川」の異名をもつほど河道の不安定な川は、その時その場の呼び名にならざるを得ませんでした。

天正（一五七三～）以前の木曽川は、今日ほどの大河ではなく、犬山扇状地以降は木曽七流（一説には木曽八流）と呼ばれる数多くの支派川に分流。木曽川から分かれた大小の河川は、一の枝川（石枕川）二の枝川（般若川）三の枝川（浅井川）黒田川（野府川）足近川（及川）と名づけられていました。

この支派川の中でも木曽川町ゆかりの川は黒田川。昔の木曽川の幹流であったと考えられています。

このように木曽川町の歴史は川との共存であり、水との闘いでした。当町南部の門間・福塚・八幡で弥生時代以降の遺跡も発掘されその分布状況から、かつては木曽川の自然堤防に集落を形成。玉ノ井・外割田・黒田などでも弥生時代の土器片が発掘されており、その全容は今後の調査に期待すべき点が多く残されています。

一方、木曽川町には伊冨利部神社や青木宮など、古代、尾張一円を支配した尾張氏の血族・伊福部氏に結びつく神社が存在することから、当地は伊福部氏の濃尾における拠点と考えられています。伊福部氏がどのような豪族であったか諸説がありますが、当町の里小牧には今も砂鉄の含有量が高い砂丘があり、門間遺跡の出土品に大量の金屎（かなくそ）が見えること、伊冨利部神社の宝剣が千年以上前の砂鉄による宝剣であったことから、製鉄にかかわる豪族であった可能性が高いと考えられています。この伊冨利部神社は後世、尾張守護の斯波氏や歴代の黒田城主の庇護を受けています。

木曽川通し図（財）徳川黎明会所蔵

鎌倉街道と黒田宿

中世の木曽川町は鎌倉街道と岐阜街道の分岐点にあたり、当時の河川の状況下において京の都から鎌倉へ向かうためには、墨俣（岐阜県安八郡）から黒田にいたるのが最良のコースでした。こうした地理的環境から黒田は宿場町として発展を遂げ、古川（野府川）を隔てて北宿、南宿もあり、市も立っていたと伝えられています。

尾張生まれの源頼朝は、八回に渡ってこの街道を通っているといわれ、その間に剣光寺の地蔵尊に名剣一振を寄進、建久三年（一一九二）鎌倉幕府開幕の折り、黒田宿に泊ったり、賀茂神社へ刀剣・鎧・冑などを寄進したと伝えられています。

しかし街道そのものは、集落を走る田舎道と自然堤防の上の道をつなぎあわせたもの。幅員約二～三mという粗末なものでした。黒田辺りは和歌の名所とされ、多くの歌人が逗留。名泉で知られる玉ノ井とともに、旅人のオアシスとしてにぎわいをみせました。こうした交通の要衝はいわば戦略上の拠点。建務中興における宮方と武家方の対立激化に及んで、暦応三年（一三四〇）北畠軍と尾張国司軍がこの黒田宿で戦い、観応元年（一三五〇）室町幕府を二分した足利尊氏の弟直義と執事の高師直との対立から黒田宿で武力衝突も。嘉慶二年（一三八八）尾張守護の座をめぐる土岐氏の内紛が起こり、黒田口が戦場に。黒田口の合戦では黒田宿はもとより剣光寺一帯が消失し、黒田善光寺も壊滅したと伝えられています。

御囲堤の成立と用水の開削

天正十四年（一五八六）の大氾濫で流路を一変させた木曽川は、その後も慶長七年（一六〇二）、同十五年（一六一〇）、元和五年（一六一九）と次々に大洪水を引き起こし、多くの集落を流失させました。天正年間には時の権力者太閤秀吉が水害防御と新田開発を目的とした治水事業を積極的に展開。尾西市起の濃尾大橋に現存する太閤堤はこの頃築造されています。この事業は関ケ原合戦以降徳川家康に引き継がれ、慶長十四年（一六〇九）には犬山から弥富に至る五〇㎞の間に巨大な御囲堤が築かれました。堤防の狙いは豊臣の勢力の残存する西国への軍事的な防御ラインである一方、家康の第九子徳川義直が治めた尾張藩を洪水から守り農業を促進さるためでもありました。「美濃は尾張より三尺低くあるべし」という不文律は美濃地方の洪水を増加させました。

御囲堤と平行して着工されたのが、圦の築造であり用水の開削です。木曽川町を流れる黒田川は堤防の完成とともに締め切られて排水路に。深刻な水不足に対処するために奥村用水が築造されました。この用水は葉栗郡大野（現在の一宮市）の大野圦を取水口とする大江用水より分岐したもの。これにより黒田（北宿）、里小牧、玉ノ井、外割田、三ツ法寺（みつはじ）の各集落は多大な恩恵を受け、新田の開墾も進められました。寛文六年（一六六九）には、奥村用水以南の利水を図るため、森上用水、牧川用水を開削。このほかにも大江用水の支線である上ノ島用水から取水、門間・黒田・内割田の灌漑にあてていました。これらの用水はその後、改修や浚渫を重ねながらこの地方の穀倉地帯を支えることになり、利水及び治水事業は進展をみせることになりました。

上ノ島用水

商品作物の生産と木曽川の水運

この地方の織物の歴史は古く、文献によれば奈良時代の尾張地方の貢物に絹があげられています。鎌倉時代に入ると桑園の広がりが、鎌倉街道を行き交う歌人の詩に詠まれるほどに。桑は荒れ地でも育ちやすく、砂礫大地である犬山扇状地や水はけの良い自然堤防洲は絶好の栽培条件を整えていたのでしょう。絹は中世において米と並ぶ貴重品。この地方の主産業として発展を遂げました。絹が綿にとって変わられるのは江戸期以降のこと。絹と綿は栽培条件が同じであり、上、絹織物でその技術も修得していることから、綿作や綿織物へ徐々に転換されました。宝暦二年（一七五二）には里小牧の畑八町三反（約三ha）で綿が栽培され、肥料も購入し使用されていたことは、ある程度商業的農業経営が行われていたことを物語っています。明和年間（一七六四～）には京都の西陣から桟留（さとめ）縞製織の技法も伝わり、当地方の織物の代名詞となった程普及しています。その後、茨城県結城地方で作られていた結城縞の技法が導入され、当地方の織物の主流は結城縞に。織屋の音はこの地方の風物詩となりました。こうした商品作物をバックアップしたのが木曽川の水運です。寛永年間（一六二四～）には上流域から木炭・割木・薪などの林産物を運び、下流域からは味噌・溜・乾物などの食料品や雑貨品を輸送しながら木曽川流域圏を形成。年貢米の船廻しや農山村の商品作物の生産が進むにつれて、北方、玉ノ井、対岸の笠松に河湊ができました。

織物のつや出しのようす

繊維産業の発展

当町域は明治二二年の市制町村制施行により、黒田村となりました。同二七年の町制施行により黒田町に。同三九年には里小牧・玉ノ井両村を黒田町に合併、同四三年には黒田町から木曽川町に改称され今日に至っている。江戸末期から隆盛を極めた綿織物はますます発展し、明治初年には玉ノ井村に七二戸、黒田村に六〇戸、里小牧村に十三戸の機屋が立ち並び、尾西織物の中心地となりました。その後、洋糸による織物が普及すると、綿作は衰退の一途をたどることに。世情の変化に連れて尾西地区の織物の変貌を余儀なくされました。この時期は大正時代の毛織物の試織期にもあたり、以後織物の主役は毛織物に。敗戦の痛手から高度工業社会を目指した昭和三一年の工業構成を見ると、工場数の九四％が繊維工業で占められ、昭和四〇年代の設備投資の拡大により、繊維産業は飛躍的な発展を遂げました。

その一方、ＪＲ東海道線や名鉄名古屋本線・県道八号線なども整備。名古屋・岐阜の両経済圏の重なりに位置するという地理的環境と交通アクセスの充実により商工業も発展し、都市化現象が進行しました。現在では「緑と光りと安らぎ」の町づくりを目指して、木曽川河川敷の公園整備や社会福祉の充実など、多彩な事業が進められています。

参考文献

『木曽川町史』木曽川町発行
『わたしたちの町木曽川町』木曽川町教育委員会発行
『地名事典』角川書店発行
『木曽川町勢要覧』木曽川町発行
『新編 宮田用水史』宮田用水土地改良区発行
『ＦＲＯＮＴ』（財）リバーフロント整備センター発行
『日本人名事典』コンサイス発行

●山内一豊生誕の地●

山内一豊は良妻で知られる戦国の武将。天文十四年（一五四五）、黒田城主山内盛豊の二男としてこの城で誕生しました。当時の黒田城は城といえども土盛を館の周りにめぐらせた程度のもの。在城当時の一豊は小禄の家に育った若き武者。豊臣秀吉に仕え、天正九年（一五八一）織田信長の行った京都の馬揃えに名馬を購入して参列し、信長の賛辞を受けました。この際、夫一豊のために妻千代が鏡箱から黄金をだして名馬を購入した下りは余りにも有名。関ヶ原直前、一豊の行動を誤らせなかったのも、千代の才覚でした。その戦功により土佐二四万石を封じる大名に。一豊の立志伝を語るには、千代の内助の功も見逃すことができません。ちなみに、幕末維新期に活躍した土佐の名君山内容堂は一豊の末裔です。

山内一豊公「出生の地」の碑

川と人のよりよい関係を目指して
着々と進められる多彩な治水事業

木曽三川の歴史は水との闘い。宝暦治水やヨハネス・デレーケによる木曽三川下流改修など、大規模な治水事業は幾度となく行われてきました。しかし、伊勢湾台風や長良川水害など、水害を根絶するには至りませんでした。度重なる出水から地域を守るために、現在も多彩な工事が進行中。川と人との共生を目指した治水事業が着々と進められています。

長良川河口堰

新たなランドマーク・長良川河口堰
堰の目的と役割

長良川は岐阜県の大日ヶ岳を源として、流域・沿川の町や田畑を潤しながら伊勢湾に注ぐ延長約一六六㎞の大河川です。昔から木曽三川は三川の分流工事や堤防強化など、様々な治水事業が行われてきました。しかしこの長良川はダムを造る適地が少ないことから、いったん大雨が降ると大洪水を引き起こしてきました。このため長良川を浚渫（川さらえ）し洪水時の水位を下げて、水害が起きにくくすることにしました。ところが川底を掘り下げると、洪水は安全に流れる代わりに、海水の遡上が従来よりも上流へさかのぼることになります。塩分を含んだ水は周辺の田畑へ悪影響を与えることにもなりかねません。

そこで活躍するのが河口堰です。浚渫による海水の遡上を食い止め、塩害防止の役割を果たします。また堰上流の流水は、淡水となるので愛知県及び三重県地域の都市用水として利用できるようになり、治水及び利水の面で大きな成果が期待されています。この都市用水は、地下水の過剰な汲み上げを主因として地盤沈下の進む濃尾平野の地下水汲み上げの肩代わりの一助となります。

また、アユやサツキマスなどが川と海とを行き来できるよう、呼び水式魚道、ロック式魚道、せせらぎ魚道が設置されています。

アクアプラザながら

アクアプラザながら内部

見て、触れて学ぶ アクアプラザながら

長良川のことを河口堰のことをもっと知ってもらえるよう、四月十四日『アクアプラザながら』がオープンしました。ワイドビジョンシアターやミニシアターなど、最新のハイテク技術を導入した同館は、まさに新しい時代のミュージアム。河口堰や親水広場、閘門や上屋などをひとつのスペースとして捉えたビックなスケールの水辺のアミュージメントパークです。川風を感じながら散歩するのも一興。呼び水式魚道の横に設けられた魚道観察窓では、遡上するアユの群れを見ることも。館内には河口堰のはたらきとしくみ、周辺の文化史跡などが映像やパネルで分かりやすく解説されています。

せせらぎ魚道

"ツインアーチ138"は清流と花と緑のパノラマゾーン
日本最大の都市公園・〈木曽三川公園〉

愛知・岐阜・三重の三県にまたがる国営木曽三川公園は、総延長一〇七㎞、計画面積一万haに及ぶ、豊かな自然環境を活用した国内最大規模の都市公園です。その広大な地域は〈河口地区〉〈中央水郷地区〉〈三派川地区〉に区分され、〈中央水郷地区〉の展望タワーは水辺のモニュメントとして知られるところ。レガッタやウィンドサーフィンなども行われ、人々の憩いのスペースとしても親しまれています。

そしてこの四月二九日、〈三派川地区〉の拠点となる〈三派川センターン〉がオープン。新たなランドマークとなっています。

ツインアーチ138

ツインアーチ138

二本の双曲線が描く美しいシルエット、園内に広がるバラや芝生広場。展望塔へは高速エレベーターでわずか、一分余り。伊勢湾や養老山脈を望む大パノラマが広がっています。東洋、の高さを誇るツインタワー138のネーミングは、所在地の一宮市を数字でシンボル化した展望塔の高さに由来するもの。この一大拠点は建設省、住宅・都市整備公団、一宮市の三者のタイアップにより完成。中央エレベーターシャフトは"木曽川の雄大な流れ"を、館外のローズストリーム（大バラ園）は源流から海へいたる水の流れをイメージしています。このバラ園は、皇太子妃雅子様の紋所がバラ化のハマナスであることから計画され、季節になると七品種三千六百本のバラが、木曽三川の水と緑に、あざやかな彩りを添えてくれることでしょう。芝生広場のモニュメントも、ロイヤルウエディングを記念したもの。その名称「比翼」は作家の三宅雅子さんが命名しています。このほかにも「花のプロムナード」や「風紋の広場」など、花と緑をふんだんにレイアウト。お囲堤に沿ってグランドや緑地公園、水生野鳥園があり、ツインアーチを核とした一帯は、アウトドアライフの拠点として脚光を浴びています。

モニュメント（比翼）

●緑が燃える 木曽川緑地公園●

木曽川町の西端には、木曽川緑地公園があります。ここは、木曽川の河川敷を利用して公園にしたもので、一面に緑がまぶしい芝生が広がっています。もちろん、サツキやツツジなど季節毎の花々も植えられ、訪れる人々の目を楽しませています。

この公園には休日ともなると、キャッチボールを楽しむ親子連れも多く訪れ、明るい笑い声が飛びかいます。

また、木曽川の河川敷は自然のサンクチャリ。ミソサザイやルリビタキなどの渡り鳥やウグイス、ヒレンジャクなどの鳥たちを見かけることも。家族で、仲間でバードウォッチングを楽しむ姿も見かけられます。この木曽川緑地は約五ha。今後は木曽三川公園計画に合わせ、整備・拡充が計画されています。

■親水広場
右岸溢流堤に水と遊ぶ広場があります、ここには長さ100m、幅5mと2.5mの2つの水路があり、春、夏の水むるぬ季節には水遊びなどもできます。アユの産卵期にはアユふ化水路として、水産振興策の一環としても利用します。

■閘門
右岸側のロック式魚道は、魚道の役割とともに、舟が堰の上流と下流を行き来するため閘門としての役割も兼ねています。

■木曽三川の河口に造られた干潟
桑名市城南沖と長島町松蔭沖の2ヵ所には、しゅんせつ土砂を利用してそれぞれ20haの人口干潟をつくりました。ここは貝類の繁殖の場になることが期待されます。

木曽川に浮かんでは消える歴史のドラマ

激しい夏の太陽を浴びながら、
ひときわ煌めく大河の流れ。
そんな美しさにも、
その激しさにも負けないほどの、
数々のドラマ、
そしてストーリー。
決してやむことのない
流れに耳を澄ませば、
きっと見えてくる、聞こえてくる。
木曽川とともに歩み、
ともに生きた歴史の物語…。

◎川の歩みとともに生きる木曽川町

町の歩みが木曽川の流れとともにあるように、その歴史、文化、自然も、絶えることのない木曽の流れのように流々と。耳をそばだてれば、天下を競う武者たちの鬨の声、目を凝らせば渡船が行き交う在りし日が、今はもうすっかり穏やかな川面から浮かび上がってくるようです。

その光景はまるで大河ドラマのワンシーン。夏草萌える川べりに、ぎらつく太陽に負けないほどの激しさが、流れの渕よりも深い哀しみが潜んでいるのでしょうか。語りつくせないほどの物語、今を静かに生きる木曽川町。この町へは名古屋からＪＲ東海道線を利用してわずか二〇分余り。今年の夏の旅は、青い稲穂が揺れる町並みから始まりました。

◎霊験あらたかな玉ノ井霊泉

今からおよそ千三百年ほど昔、時に天平三年、西暦七三一年のことです。聖武天皇のお妃、光明皇后は重い病の床に。いつまでたっても回復の兆しが見えぬ皇后をいたく心配された聖武天皇は、行基上人に御平癒の祈祷を命じました。行基上人とは百済王の子孫と伝えられる高僧。諸国を行脚し、道路、堤防、橋梁、貯水池などを造り、多くの寺院を建立したいわば、立志伝の人物。信仰にも厚く庶民にもたいそう慕われていたそうです。

その行基上人が十七日間にわたって祈願を続けたところ、「尾張国に名水あり」とのお告げがあったとか。急ぎ尾張国へ向かった行基上人は、当地玉ノ井にて名水を汲み、奈良の都へ立ち戻り光明皇后に献上したところ、病は見事、御平癒されました。

この功が認められたのでしょうか。行基上人は聖武天皇より大僧上正位を授けられ、人々からは、行基菩薩と崇め奉られたと言われています。

その伝説の地が、木曽川町西端、加茂神社境内にある玉ノ井霊泉です。この神社は病気平癒の御願成就のため、孝譲天皇の天平宝字年間（七五七～六五）に創建され、以来信仰の霊場として名を馳せたところ。玉ノ井霊泉の名は広く全国に広がりました。

やがて時代は下り、鎌倉の御世のこと。玉ノ井はこの地の黒田と並んで、鎌倉街道のルートになりました。当時の鎌倉街道は京の都と鎌倉を結ぶ重要幹線でありながら、ここ木曽川町のそれは田舎道や自然堤防洲をつなぎあわせた貧弱なもの。美濃国・墨俣、及村を経て尾張へ入つ街道は、玉ノ井、黒田などを経て、東海道と合流。その状況を『海道記』の著者源光行は「東へ行きかう旅人の過ぐる堤の道」と記しています。

つまり、この地の鎌倉街道は自然堤防上を通り、時には武士の一団が駒の足音を響かせ走り抜けていく…。「物騒がしい」と記述されていることから見ても、相当の通行量があったのでしょう。

ともあれ、木曽川を渡る前後の玉ノ井霊泉は、さながら砂漠のオアシス。足をたよりに、はたまた馬で駆け抜ける当時の旅人たちにとって、長旅を癒す名水であったのでしょう。

名水あるところに一幅のドラマあり

その玉ノ井も鎌倉街道の衰退に伴って、歴史の裏舞台へ。数え切れないほどのドラマを押し隠すように、今もぽつりと佇んでいます。

◎籠守勝手神社に秘められた落人の哀しみ

歴史の裏舞台に閉じ込められてしまった物語は、玉ノ井霊泉だけではありません。

その昔のこと。第十七代履仲天皇は、大泊瀬幼武王を後継者とされた後、市辺押盤皇子をことのほか慈しみ、市辺押盤皇子を天皇にと考えられました。これを怒った大泊瀬幼武王は、近江国蚊屋野で鹿の猟と見せかけて、こともあろうに皇子を殺害してしまったのです。

気の毒なのは残された二人のお子。いち早く父君の様子が伝えられると、災難を逃れるため、美濃の及村を経て木曽川をお渡りになり、玉ノ井から黒田松枝郷へ。ここに鎮座する黒田明神を仮のお宿とされました。その夜は丁度葉月（太陰暦でいう八月）十五日望月の夜。村人は親切にもてなし、お芋（里芋）によるごちそうを添え、一夜の饗宴を開きました。村人は皆、二人の皇子のお忍びの心を慰めたのでした。

二人の皇子は饗宴に対する礼にと、芋の葉にうるわしい夜露を黒田明神に奉献され、村人も皆、皇子のご多幸を祈願しました。しかしながら、二人ともせつないお忍びの身。夜明けを待たずにご出発されました。以来、黒田明神を籠守勝手神社と尊称し、旧暦の八月十五日の夜に、御駕籠祭りが行われるようになりました。

◎源頼朝ゆかりの剣光寺

木曽川町のほぼ中央、どっしりした門構えの剣光寺は、源頼朝ゆかりの古刹です。この寺は臨済宗妙心寺派に属し、号は大徳山、地蔵菩薩を本尊としています。この地蔵尊は、もと黒田の地蔵と呼ばれ、尾張の六地蔵（黒田、六角堂、小析、熱田、鳴海、根高）の中の一番に挙げられる由緒正しきものです。

加茂神社

気ままにJOURNEY

そもそも地蔵尊とは、道路の安全を道祖神に祈つたのと同じ気持ちから起こったもの。鎌倉街道の要衝としてにぎわった黒田宿に霊験あらたかなる地蔵尊が創建されたのも、当然の帰結であるといえましょう。

ともあれ、剣光寺と源頼朝の関係は、頼朝が鎌倉街道を上洛途中の出来事から始まります。

尾張熱田の大宮司の娘を母にもつ頼朝の地蔵信仰は想像以上に強かったのでしょう。

鎌倉を拠点に全国制覇を遂げた頼朝は、建久元年（一一九〇）十月、鎌倉を出発、この頼朝上洛についての行列は、公式のものであったため、威風堂々たるもので千騎を越えるものであったと伝えられています。

その帰途、行列が黒田の剣光寺辺りに差しかかった時、頼朝の馬が急に進まなくなった…。思い起こせば、今日の自分があるのは、地蔵尊に誓願をかけていたため、武運もあれど、神仏のお陰であることに思い至ったのでした。

そこで頼朝は早速この地の剣光寺を訪れ、地蔵尊に詣でた時に、「自分が伊豆で兵を挙げた時、夢に見た地蔵尊とはこの像にあり」と、大粒の涙をこぼされたとか。幾多の戦場を乗り越えてきた頼朝にとって、かの地蔵尊は、神仏の再来であったのでしょう。

頼朝はこの地蔵のために、宝剣一振と近辺の田畑五町八反を寄進奉納しています。

ところが奇跡は続くもの。正治三年（一一九九）、頼朝他界の夜に、地蔵のもつ宝剣が霊光を発して南東の隅を照らしたのでとか。煌煌と天を衝く光りに驚いた村人はこの寺に集結。それ以来この寺を剣光寺と名づけたと伝えられています。

その後、本尊は兵賊の手によりもちだされ、わずか十一銭で一宮の真清田神社に売り払われ、宝剣は熱田の八剣宮に収められたとか。幾度かの戦乱ですっかり荒廃した剣光寺は、妙心寺宗匠第十世先照の手によって、復興再建が努められたと伝承されています。

◎山内但馬守盛豊、十郎親子の菩提寺―法蓮寺

戦国の名君である山内一豊の出身地は、ここ木曽川町であると伝えられています。その山内家の出自は今もって謎。一豊の父盛豊は岩倉織田家の家老で黒田城主としてこの地を治めていたと伝えられていますが、やはり謎の謎。多くの謎に包まれながらも、かの名君を支えた妻千代の内助の功は大和撫子不在!?といわれる現代社会でさえ、語り伝えられるところです。

一説によれば、山内盛豊が尾張を訪ねた折り、たまたま郷戸の渡（長良川の渡で墨俣より北）で、武門の誉れ高い土佐の五藤三郎と出合い、その縁で岩倉織田氏に仕官。その代官として、黒田城主に封じられたと伝えられています。

しかしながら、主君織田信行は謀反の科で殺害され、弘治三年（一五七七）黒田城も夜討ちという憂き目に。盛豊、十郎父子は無念の討死、一豊の母と一豊、その弟妹は裏手の竹藪に逃げ延びて、九死に一生を得たと伝えられています。

盛豊の死についても、自殺説や浮野合戦での戦死説など、諸説が入り乱れていますが、父子ともに法蓮寺に葬られたことは、ほぼ間違いない出来事。かの名君を残しながら、志し半ばでこの世を去った盛豊・十郎父子。彼等の墓に手を合わせながら、その死の謎を探ってみるのも、旅ながらの妙味。その推理は、謎多き歴史解明に一役買うことだってありえるのかもしれません。

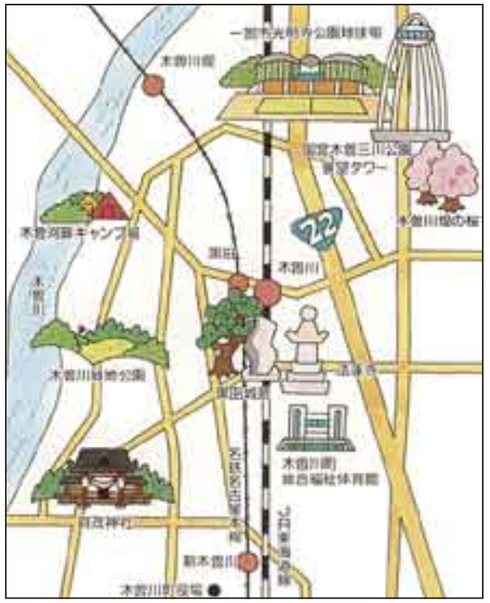
馬守盛豊、十郎父子の墓

●一豊まつり●
8月5日・6日：黒田小学校グランド及び体育館

山内一豊生誕450周年を記念して木曽川町商工会主催による「一豊まつり」が行われます。戦国絵巻さながらの武者行列が町内を練り歩き、夜ともなれば浴衣の華。盆踊りや夜店で賑わいます。ご家族連れで、お友達同志でぜひお出かけください。

木曽川町行事

- ■文協祭……5月13日～5月14日　木曽川町中央公民館
- ■一豊まつり……8月5日～8月6日　黒田小学校グランド及び体育館
- ■平和事業（戦後50周年記念映画会・記念式典）……8月19日～8月20日　木曽川町総合福祉体育館
- ■町盆踊り……8月19日～8月20日　木曽川町町民運動場
- ■商工祭……9月16日～9月17日　木曽川町中央公民館
- ■町体育祭……10月1日　中学校運動場
- ■町文化祭……11月4日～11月5日　木曽川町総合福祉体育館
- ■ジョギング大会……12月3日　木曽川緑地公園
- ■凧あげ大会……12月10日　木曽川緑地公園



●公共交通機関利用●
JR／東海道線名古屋方面から急行利用で→約20分
東海道線岐阜方面から急行利用で→約20分
名鉄名古屋本線名古屋方面から→約20分
名鉄名古屋本線岐阜方面から→約20分
●マイカー利用●
約1時間
名古屋I.C.→→→東名高速道から名神高速道を20km→→→一宮I.C.
→→→国道22号線利用で北西へ15km→→→木曽川町役場

特集
明治改修
第四編

現在の木曽三川下流の礎を形成した分流工事

明治四五年、木曽三川下流改修はついに竣工。治水上大きな効果をもたらしましたが、その一方、用地買収にともなう家屋の移転、北海道への移住など、大きな影響を与えています。こうした影の功績を風化させない為にも、そして今後の治水事業を考える上でも、改修工事による影響と成果を改めて見つめ直したいと思います。

災害を乗り越えて

二五年の歳月をかけて実施された木曽三川下流改修。しかし、その道のりは決して平坦なものではありませんでした。

明治二四年十月二八日未明、根尾を震源地として勃発した濃尾震災は内陸型としては最大級のM8。阪神・淡路大震災と同じく活断層による直下型でした。この地震による被害は揖斐川上流部を中心とした広域に及ぶもの。幸い下流部の堤防決壊には至りませんでしたが、未曾有の大震災が工事の進捗に影響を及ぼしたであろうことは、想像に固くありません。

一方、明治二九年には七月と九月二度に渡って大洪水が発生し、美濃の平野は一面水浸しとなりました。この洪水による罹災者は七月が十九万人、九月が二七万人。大垣城に残された洪水の痕跡は現在の標高九mに記されており、大垣市は全域に渡って屋根まで浸水被害を受けたといわれています。

その後も明治三〇、三一、三九年と木曽川水系では大きな洪水が発生し、岐阜県の惨状は目を覆うほど。こうした状況にありながら、木曽三川下流改修は着々と進められ、明治四五年、西洋技術を導入した大規模な治水事業は完成の日を迎えることになりました。

根尾谷（「木曽三川の治水史を語る」）より

三川分流工事の影響規模

木曽三川下流改修が輪中地帯に与えた影響は大きく、中・下流域の現在の地域社会は、分流によるものといっても過言ではありません。西洋技術を導入した画期的な工事は、治水上大きな効果をもたらしましたが、一方では、地域住民の生活に大きな影響を及し、潰地やそれに伴う住民・家屋の移転なども広範囲に発生しました。

改修によって土地条件上、なんらかの影響を受けた地理的範囲は、上流は岐阜市、大垣市、河口部は桑名市、長島町、木曽岬町にまで及び、とりわけ木曽・長良背割堤の施工区域に当たる輪中堤を背割堤の土台とされた高須輪中（現在の海津町）、立田輪中（現在の立田村）、河口部に位置する長島輪中（現在の長島町）は、新河道を開削するために多くの土地が潰地となりました。

具体的な影響規模は内務省作成「木曽川改修工事概要」によると「木曽川改修の為買収を要する土地は、岐阜・三重・愛知の三県を通じて二千九百余町歩（約二九㎢）、移転を要する宅地十三万三千六百坪（約四四㎢）、この戸数約千八百戸に達する」

この買収を要した土地は名古屋市の北区と東区をあわせた面積よりも大きく、いかに改修工事の規模が大きかったのかがわかります。

さらに新川開削によって形態が変化した輪中も多く、小藪輪中は長良川の新河道によって二分され、それまで長良川左岸にあった西小藪は右岸域となって高須輪中に含まれることになり、羽島市は高須輪中に飛び地を持つことになりました。

また、改修前の福原輪中は立田輪中とほぼ陸続きでしたが、新木曽川の河道付替によって切り離され、地域の一体性はなくなりました。

大垣城洪水痕跡（「木曽三川の治水史を語る」）より

多くの犠牲を代償に

いずれにしろ、改修工事は地域に多大な影響を与えたようで、工事に当たっては、地位住民からの設計の変更や中止・延期が要請されたり、土地収用に関する紛争がいくつか生じました。

例えば立田輪中では、千余名の住民が一反百～百三十円の土地六五三町歩（約六、五ha）の土地を六〇～八〇円という破格な値段で買収され、その補償的な意味もあって佐屋川廃川の払い下げについては優遇的な処置も当初は計画されていました。そのため立田輪中の住民が改修の進行と同時に払い下げを期待して、佐屋川の堤防に藁小屋や板囲いの仮住居を建てて生活をしていましたが、その間、半年毎に立退命令が出たり、時には「焼き払う」との威嚇手段もとられていたといわれています。

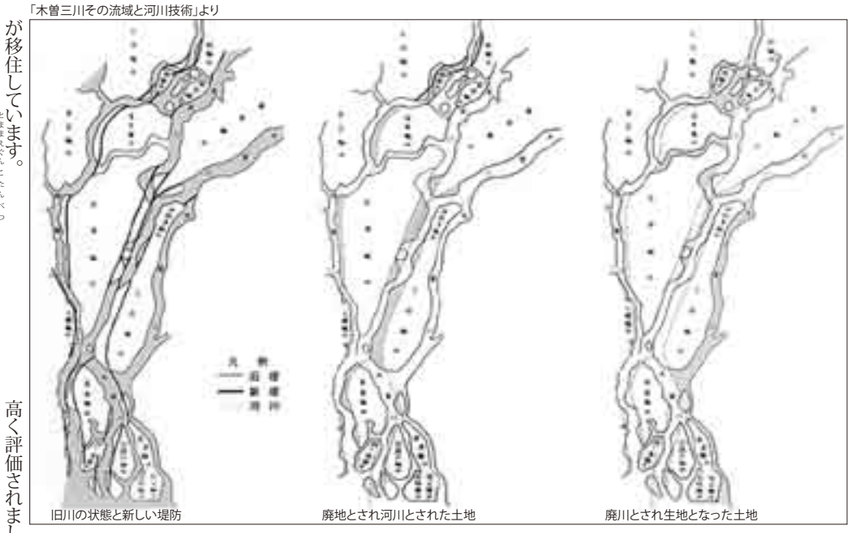
また、改修工事によって居住地を変更した住民も多く、例えば現在の長島町にあたる長島輪中、葭ケ瀬輪中以南でも、全村移転は十二集落にのぼっています。

彼等の多くは新堤沿いに転居しましたが、名古屋、四日市、北海道などに移転していった人々も多くいました。

明治二八～三二年までに北海道へ移住した人々は、長島町で一七四世帯、木曽岬村で七四世帯を数え、木曽岬村では横満蔵の大田松次郎の提唱により北海道石狩への移住が勧められ、村民の二割程度が移住しています。

北海道の苫前郡古丹別には大字長島という古里にちなんだ集落も形成され、移住者の心の内を推し量ることができます。

「木曽三川その流域と河川技術」より



三川分流の成果

このように改修工事は地域住民の生活に大きな影響を与えました。改修によって分断された輪中は、輪中外との交通手段として渡し舟があったとしても、改修前とは比べ物のならないほど不便になりましたし、高く評価されました。

また、改修前後の土地評価の推移については、別表に記した通り。施工区域全体の地価上昇分は六三四万円であり、うち一等二等水腐地の地価上昇分は五三六万円。この数字から悪水や洪水に悩まされる下流域も、分流工事により耕地として新たによみがえり、評価されたことが伺えます。

乾田化が進む輪中地帯の農業構造

輪中としてのコミュニティも損なわれたことが想像されます。

しかしながら、改修によって廃川となり、堤防敷や河川敷が新たな耕地となったものも多く、その面積は岐阜県分だけで二四六町五反（約二、四㎢）、愛知県で四八〇余町部（約四、八㎢）。当時の国策である食料増産に応えるものとして高く評価されました。

種別			面積および地価
改修施工前	無公害	段別	11,386町8反歩
		地価	7,001,440円35銭
		地価一反歩当	61円49銭
	二等水腐地	段別	16,611町3反歩
		地価	5,831,971円4銭
		地価一反歩当	35円11銭
	一等水腐地	段別	5,179町6反歩
		地価	1,701,090円20銭
		地価一反歩当	32円11銭
改修施工後	二等水腐地の無公害となるべきもの	無害地地価に準じ積したる地価	10,296,377円39銭
		現今地価を前地価より加除したる残即増加額	4,464,406円35銭
	悪水面の稲田となるべきもの	反別	
		地価	398,230円73銭6厘
	一等水腐地の二等水腐地以上の上稲田となるべきもの	無害地地価に準じ積したる地価	2,600,000円76銭5厘
		現今地価を前地価より加除したる残即増加額	898,910円56銭5厘
	悪水面の稲田となるべきもの	反別	
		地価	582,128円70銭
一等二等水腐地価増加額			5,360,000円
増加地価			6,343,676円35銭1厘

木曽川改修後利益取調略表

分流工事に伴って、輪中地帯特の風物詩、堀田・堀潰れ、という耕作方法も変遷を遂げました。

下流改修に伴って整備された耕作地、旧耕地整理法（明治三二年）、新耕地整理法（明治四二年）に基づいて行われた耕地整理事業などによって乾田化が進み、徐々にその姿を消していきました。

従来の引き鎌や鋤簾などによる重い農作業からも解放され、生産構造も変貌の兆しをみせました。

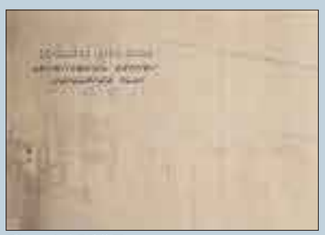
当時の高須輪中（海津郡）の水稲反当収量を見ると、明治一七～二二年を百とした場合、明治四四年～大正四年の平均値は、一九八、九とほぼ倍増、安八郡においても同じく二二四と二倍強近く増産されています。これは桑原輪中においても同様で、三川分流によって排水が良くなり、種子改良や施肥の影響もあって低湿地でも海津郡や安八郡に近い豊饒をみるようになりました。

さらに、湿田時代には高畦耕作による裏作はごくわずかでしたが、大正中期頃から裏作が行われるようになり、麦、菜種、じゃがいもなどの作付が急増しています。

このように大きな犠牲を払った木曽三川下流改修は治水上だけではなく、農業生産やそれに連なる地価評価の面でも大きな役割を果たし、その後の全国の河川改修の発展を促進させました。

木曽三川下流改修のあらまし

明治政府は西欧の近代技術を導入し、抜本的な改修、すなわち完全な三川分流計画を策定し、蘭人工師ヨハネス・デレーケの監修のもと、明治二〇年に着工しています。その目的は①洪水防御②堤内の排水改良③舟運路の改善であり、そのうち①と②が重点課題。高水工法を主体に第一期から第四期にかけて工事は行われ、明治45年には完成、三川分流を実現しています。


デレーケによる改修図
木曽川下流工事事務所所蔵

参考文献
『木曽三川の治水史を語る』
建設省木曽川上流工事事務所発行
昭和四四年
『昭和五九年度／木曽・長良背割堤環境調査業務・報告書』
建設省木曽川下流工事事務所
昭和六〇年
『木曽・長良背割堤ハンドブック』
建設省
木曽川下流工事事務所監修・発行
昭和六二年

明治改修の成果と影響

丸山幸太郎氏

丸山幸太郎氏のプロフィール

岐阜市立明徳小学校長（現職）
岐阜県歴史資料館長、地方史学会評議員、岐阜史学会幹事、岐阜郷土資料協議会幹事。岐阜県内の小学校の他、岐阜県史編纂室主査、岐阜県教育委員会指導主事、文化課課長補佐、本巣小学校校長を歴任。この間、岐阜県内の揖斐川町史、池田町史、南濃町史、輪之内町史、海津町史等、郷土史や日本農業全書24を執筆。県史編集室では、「治水／用水・輪中」分野を担当、「近代美濃の治水制度」など輪中史に関する論文多数。

水害常習地帯であった木曽三川下流域の治水は、画期的な宝暦治水によって大きく前進をしましたが、三川の完全分流など根本的解決は、近代工法を導入した木曽三川下流改修によってはじめてなしとげられました。

木曽三川下流改修は、明治初年からの官民による強い要請・提言をもとに、国において調査・諸準備が進められ、ようやく明治二〇年に着工しました。以後、改修工事は濃尾震災・日清戦争・二九年大洪水など、多くの困難にあいながらも、明治三三年に、主要工事の三川分流工事を竣工し、同四五年にすべての工事を終えました。この改修によって、あいつぐ水害や排水に悩んできた輪中地帯の農業生産は、安定して上昇する条件がととのえられました。

土地収用によって移住を余儀なくされた人々

木曽三川下流改修は、三川の川幅を増やしたり、新しい河道を築いたりするために、多くの土地の買収や家屋の移転を必要としました。そのため、土地収用や家屋移転を余儀なくされた関係住民の中には、提示された補償金に納得がいかず、高須輪中成戸地区（海津町）のように、訴訟を起こす人たちもいました。訴訟が長びいている中で、明治二九年に大洪水が発生し、土地・家屋に水害を受けた訴訟者たちは早期解決を望み、国・県も歩みより示談・和解の協議と進みました。洪水により耕地を失い住家も食糧もない住民には、災害救助等として、台帳面によって土地買収したり、流失家屋にも移転料を支給したりするようにしたので、用地買収は急速に進み、明治三二年になってほとんど終了しました。木曽三川下流改修実現の背景には、こうした土地収用・家屋移転にかかわり大変な努力があったのです。

治水上の成果

木曽三川下流改修は、明治三三年（一九〇〇）主要工事の三川分流ができた以後、恒常的であったといってもよい洪水と水害が、ほとんど稀なものとなったことからも、治水効果の極めて高いものであったことがわかります。その明治三三年以後一〇年と、以前一〇年の水害状況を比べてみると、水害による被害程度が激減しており、治水上大きな成果を数字の上でもみることができます。三川の完全分流により、出水時の減水が速やかになり、堤防を破ることが少なくなったことが、第一要因といえましょう。三川分流後、耕地と農作物の被害が、少なくなったとはいえ、激減とまでいっていないのは、堤内の各輪中に滞留する悪水の排除に時間がかかったことを挙げなければなりません。しかし、明治後半から、各輪中は連合して水害予防組合をつくり、排水場の改良に努力し、明治末期から動力排水機を導入するようになって、さらに農作物被害等の軽減が進みました。

■木曽川下流改修前・後10年間流域水害比較

項目 ＼ 改修前後		改修前・明治23～32	改修後・明治33～42	改修後×100%
死亡者		316人	10人	3%
負傷者		732人	10人	2%
家畜死傷		6,552頭	0	0%
建物	流出	15,436軒	314軒	2%
	破損	102,481軒	12,838軒	12%
耕地	損亡	3,277町歩	928町歩	28%
	荒地化	12,979町歩	919町歩	7%
農作物被害		13,522千円	3,179千円	23%
宅地	面積	3,912町歩	541町歩	14%
	損失	444千円	8千円	2%
堤防	切所	1,821箇所	228箇所	12%
	延長	316km	16km	5%
	損失	1,209千円	78千円	6%
水害損失年平均		35,126千円	2,907千円	8%

（岐阜県治水史・下）所収表による

田舟農業（河合孝氏撮影）

■1反（10a）あたりの米の取れ高の移りかわり（単位：石　1石は米150kg）

	明治17～22	23～28	29～33	34～38	39～43	大正17～22
海津	0.933	1.234	1.140	1.316	1.666	1.856
養老	1.079	1.102	1.230	1.049	1.263	1.532
安八	0.927	1.188	1.570	1.484	1.904	2.076
羽島	1.236	1.125	1.346	1.361	1.482	1.614
県平均	1.179	1.207	1.364	1.413	1.626	1.786

（岐阜県統計書）より作成

■輪中地域の耕地面積増加のようす

	明治30年	明治33年	明治35年	明治41年
海津	3,865.0町	3,786.1町	3,786.1町	4,040.4町
養老	4,286.8町	4,368.0町	4,506.9町	4,544.1町
安八	7,204.8町	7,551.9町	7,655.7町	7,449.4町
羽島	4,905.0町	4,891.6町	4,915.0町	5,176.0町
以上計	20,261.6町	20,597.6町	20,863.7町	21,209.9町

（岐阜県統計書）より作成

農業生産上の成果

木曽三川下流改修が、当時の農業生産に与えた成果としては、まず水稲の反収量増加が顕著にあらわれました。岐阜県における三川下流流域の海津・養老・安八・羽島四郡の一反すなわち一〇アールあたりの米の取れ高は、すでに三川分流以降から着実に上昇しました。明治二〇年代まで、一反平均米三俵程度であったのが、明治末年からは四俵を越えるに至りました。それだけ、農業生産が安定し、用排水施設の改良や土地改良を進めやすくなったことを示しています。

揖斐川の河川敷地に耕地の大半があった安八郡塩喰（輪中内町）では、それまでの耕地の四分の三を改修のため収用され残りの地は二四町歩（二四ヘクタール）となってしまいましたが、米の生産量など農業物の年平均収穫量は、むしろ増加し、小作年貢収入は、増えるようになったと、元地主は語っています。

耕地は、改修による新河道・堤防敷地等で収用され減ったところもありますが、全体としては増加しました。水腐地・池・廃川地等の耕地化が可能となり、水害の解決と生活の安定をもとに、耕地を増やす努力が払われ、拡大していきました。

長良川や揖斐川の改修で、大榑川、中村川、中須川の三支派川が締切られ、廃川となった河川敷地は一三九町歩（一三九ヘクタール）、旧堤敷地一〇七町歩（一〇七ヘクタール）が、耕地化可能となり、流域の現在の輪之内町や安八町地方では、耕地が著しく拡大されました。

耕地の拡大、とくに水田の増加にともない、農作物の種類が変わってきました。菜種・綿・藍・煙草等の工芸作物や大豆・小豆・稗・粟等の雑穀栽培が減り、水稲を中心に裏作としては大麦・小麦、畑作としての桑栽培という農業が主流となってきました。この変化の背景には、木綿輸入・生糸輸出など海外貿易の関係で、桑園増加・養蚕業振興の波が輪中地域にも及んだということもあります。養蚕業の盛況は、三川下流域において廃川敷地の桑園化にとどまらず、堤外河川敷の洲の桑園化をみるようになりました。

埋め立て前（河合孝氏撮影）

埋め立て後

水害予防組合の設立

木曽三川下流改修後、洪水の不安が消えたわけではなく、本堤内の輪中間を囲む内堤はそのままのところも少なくありませんでした。しかし、水害の激減によって、従来の狭い輪中意識から脱却し、近隣町村・輪中が連帯して、水害問題にあたる気運がかもし出されました。

大正一五年（一九二六）、安八郡の墨俣・結・名森・牧・福束・仁木・大藪の七町村その他が揖斐川以東水害予防組合を結成したのをはじめ、各地で、用排水改良組合が設立され、広域で長期的な展望をもって、水害対策、用排水改良、耕地整理などの土地改良が進められるようになりました。

稲刈り（河合孝氏撮影）

BOOK LAND

古田織部
著者　丸山幸太郎
発行本巣町

安土桃山時代の茶人古田織部の生誕四五〇年を記念して発行された本書。著書丸山幸太郎が六年の歳月をかけて織部の生涯や精神を追及。その波乱の生涯を歴史学者の視点から描く。

織部の出身地は、岐阜県本巣町。山口城主の子としてこの世に生を受けたという。お椀を伏せたような山々、清き川面をみせる根尾川…。この美しい自然が茶人織部につながっているのであろうか。師千利休が非業の最期を遂げた後、その後継者として『侘び茶』をベースに独自の茶道を創案した織部。焼き物、茶室、庭園のデザインなど、その芸術活動は多種多彩だ。新しい芸術の世界を切り開き、時代を生きた織部の生涯に迫る貴重な一冊である。

民話の小箱

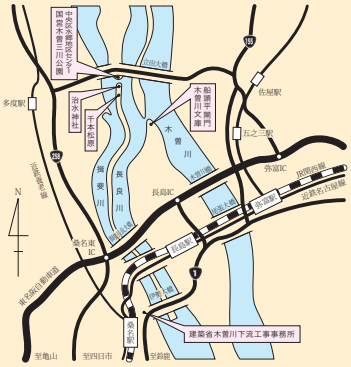
明神のおいかり

木曽川町

むかし、むかしのこと。
木曽川町の田んぼは、黒田川に支えられておった。
しかし、河道定まらぬ暴れ川のこと。
幾度もの大氾濫の後、とうとう堤が造られ、
黒田川は完全に締め切られたそうな。
この御囲堤とよばれる大きな堤防のおかげで、
洪水は減ったもののこれまでのように、
川から田んぼへ水を引くことはできぬ。
それからというもの、わずかな用水をめぐって水争いが絶えず、
用水や圦（取水口）を壊し、
無理やりに自分の田へ水を引く者さえあったという。
そんなある年、五〇日あまりにもわたる大かんばつが村々を襲った。
照りつける太陽、痩せ細る稲…。
用水や井戸は底を露あらわに枯れ始め、
人々の心までを田の水ように干上がらせてしもうた。
「あの村には、まだちいっと水が残っとる」
「あの堤壊して、水引こまいか」
水をめぐった醜い争いは、
日毎に勢いを増していったそうな。
そんな村人の前に、ある日白髪の老人が現われた。
老人は「この争いをすぐに止めねば、
村の土地一面は焦土と化し、
米はおろか農作物一切が不作になるであろう」
と厳しい表情で言い放ち、
驚く村人を背に神前でふっと消えてしまったという。
「う…氏神大明神が、老人に姿を変えておいでなさった」
「大明神のお告げじゃ」「氏神様が怒っておられるぞ」
このできごとに大層恐れをなした村人は、さっそく争いをやめ、
雨乞いおどりや百度参りをして、ただひたすら雨が降るのを願ったという。
その翌年、全国的な飢饉が農民を苦しめたが、
不思議なことにこの一帯の村々にはさほどの影響はなかったそうな。
「これもすべて氏神大明神のお告げのお陰じゃ」
と村人は語り合い、以来、毎年三月五日は村中が仕事を休んで、
神社に参拝するようになったと言い伝えられています。

木曽川文庫利用案内

《開館時間》 午前9時～午後4時30分
《休 館 日》 毎週月曜日・祝祭日・年末年始
《入 館 料》 無料
《交通機関》 国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分
《お問い合わせ》
船頭平閘門管理所・
木曽川文庫
〒496 愛知県海部郡
立田村福原
TEL(0567)24-6233



編集後記

カラフルな帆をなびかせるウィンドサーフィン、パドルさばきも鮮やかなカヌー…。今、川辺の風景は、マリンスポーツの花盛り。リバーサイドでアウトドアライフを楽しむのも一興です。

三宅雅子作・小説「乱流」がドラマ化されます。

CBCテレビ制作のスペシャルドラマ「乱流」の放送は、8月19日㈯午後2時から。西洋技術を駆使して行われた木曽三川分流工事とその陰に咲いた愛…。

是非、お楽しみください。

編集部では皆様のご意見、ご感想をお待ちしています。宛て先は、木曽川文庫まで。

Vol.15編集にあたっては、木曽川町役場ならびに丸山幸太郎先生にご協力をいただきました。ありがとうございます。

次回は羽島市を特集します。こ期待ください。

『KISSO』Vol.15　平成7年7月発行
発行：建設省中部地方建設局木曽川下流工事事務所　〒511三重県桑名市播磨81　TEL(0594)24-5715
制作：財団法人河川環境管理財団　〒450愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号（東海ビル）TEL(052)565-1976

左上左：渚プラン（揖斐川下流）
左上右：玉井清水
左下：ツインアーチ 138
右：黒田城跡